CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

「創価教育学会史」序説（2）

―牧口常三郎と犬養毅―

神　立　孝　一

1．はじめに
2．犬養毅の生涯
3．牧口と犬養
4．「創価教育学支援会」と犬養毅
5．まとめにかえて

1，はじめに

どうも皆さま、おはようございます。今日は暑いところお運びをいただきまして大変にありがとうございます。「創価教育学会史序説（2）」ということで担当させていただきます神立でございます。よろしくお願いいたします。

まず、簡単に自己紹介をしておきたいと思います。名前は「神立」と書いて「かんだち」と読みます。「神が立つ」というのはうちの大学にふさわしくない名前だという批判もございますが、人間には如何ともしがたいことがいくつかありまして、その一つが自分の苗字というのは自分で決められないという。名前というのは生まれながらにして決まっていて、それに従わざるを得ない。女性の方は好きな苗字の方のところに嫁がれると変わるわけでございますが、男性はそういうことになっていませんのでしかたがないのですね。この「神立」は地名で、茨城県の筑波山麓にあるその地域の名前です。神に達する。神は神様じゃなくて天という意味だそうで、天上に達する。近いというような意味で、山の上に住んでいた山賊の一員じゃないかと。そんなようなことだそうでございます。1955 年生まれで、来ないと思っていた還暦がすでにまいりまして、個人的にはショックを受けつつ、年齢も人間の力では如何ともしがたいことですので甘んじております。しかし、衰えというのは如何ともしがたく、友人たちとの語らいが病気の自慢ということになってきまして、情けない話ですが、そんなことでございます。

創価中学校 1 期生で、創価高校 4 期生です。1968 年に学園が開設されたときに、中学校の 1 期生として学園に通わせていただきました。そのまま進みまして高校が 4 期、大学もそのまま 4 期でございます。大学には 1974 年入学でした。そのまま大学院に進みまして大学院は 5 年間で

Koichi Kandachi（創価大学副学長・経済学部教授）

ございますので、マスター（修士課程）２年、ドクター（博士課程）３年、合計５年間。そのまま創価大学の経済学部の助手として採用していただきました。これで教員の生活が始まりました。計算していただくとお分かりいただけると思いますが、すでに 30 年を過ぎてしまったということでございます。2014 年から大学院・経済学部研究科の責任者である研究科長を仰せつかっております。

さて、「創価教育研究所」というものがございまして、これは本学の歴史を残す部署です。本学の歴史はご存知のように牧口先生、戸田先生、そして池田先生という３人の方々の思いがこもって大学が設立された。開学は 1971 年でございますが、関係する様々な資料などを集めて分析し研究する。それが創価教育研究所でございます。その創価教育研究所の所長を 2016 年まで務めさせていただきました。その関係で今日のテーマになっております。そのまま宿題となっているのをもち越しております。今日はその一端をご紹介させていただくということになるかと思います。

2017 年に副学長の任命をいただきました。創価大学は馬場学長のもと、副学長が２人おります。僕ともう一人は文学部の田中亮平先生。ゲーテの研究者で、創立者がゲーテの研究の講義をしていただいた時に、いってみれば討論相手だった方でございます。もう一人の副学長で、私と二人の体制で様々なお仕事をさせていただいています。

夏季講座につきましては、昨年、１年間だけお休みみたいなかたちになりました。関西学園でも夏季講座をやっていまして、実は私、創価学園の理事もやらせていただいていまして。理事がその担当しないのはどういうことかと学園の方から責められまして。それではやらせていただきます、ということで去年は大阪で、関西学園で講義を担当させていただきました。その関係で１年間だけお休みをいただいてしまったようなかたちになっています。今年は、いままでの研究のまとめということで、もう一度しっかりやるようにというお話がありまして、担当させていただきます。今日一日、暑いですけれども、よろしくお願いします。

それで、今年も「『創価教育学会史』序説―牧口常三郎と犬養毅―」というテーマを掲げ、実際に６月から様々な資料をみて検討いたしました。その結果、非常に難しいテーマだということに後から気がつきました。これは、えらいテーマを選んでしまったな、という印象です。いままでもそういう感じはずいぶんとあったのですが、今回は本当に皆さまの前でこんなことを申し上げてはなんですが、劣悪です。本当にわからないことだらけで。そもそもわからないことを追求するというのが大学なのですが。高校までですと、答えが出ているものを皆さんにお知らせすることになるのですが、結局、これはわからないよ、ということをお知らせするのも大学の講義かなということで。色々な方々にご相談をしたのですが、わからないことが多い。資料が残っていないのですね。資料が残っていれば、もっともっと色々なことが追求できていたと思いますが、それができません。いずれにしても、自分のできるかぎりのことをやろうと準備をしました。中身的には曖昧なところも残っています。それから、結論はありません。出ませんでした。しかし、

考える材料として、今日は皆さまにお聞きいただければと思います。そういう意味では、大学の講義らしい講義です。言い訳に過ぎませんが。これでお互いに考えましょうという一つの問題提起ですので、そのことを前提にしまして今日はお聴きいただければと思っております。

このディスカバリーホールは非常に良い会場で、ここで担当させていただくのは大変ありがたいと思っておりまして。普通の授業をここでやっているのですが、席が他の教室に比べて本当に良いです。ふかふかですし。受講者にとっては一番良い環境で、途中でどこか違う世界にいく場合もあると思います。それはそれで結構です。違う世界で、創価大学を味わっていただくということも大事だと思いますので。お気になさらずに楽しむということでお願いできればと思います。

先ほど学長からも話がありました。ドラマ『小さな巨人』は、このディスカバリーホールも使っていまして。壇上の真ん中で和田アキ子さんが吠えたシーンがございました。各種のテレビ番組でも使っていただけるような良い会場でございます。創立者もこのディスカバリーホールに来られて、お座りになったその席がございます。

まず確認ですが、これは牧口先生の研究です。いつも申し上げていますが、研究の対象として「先生」というのはあまり付けないのですね。たとえば、ゲーテの研究ではゲーテ先生と言わないですね。マルクスの研究をするのにマルクス先生と言わないわけで、一般的な研究対象になると名前というのは牧口先生であれば牧口、戸田先生のことは戸田、池田先生のことは池田と言わざるを得ない。むしろ、言うのが普通である。そういうことで、先生が入ったり、入らなかったりしますが他意はございません。上目線とか、見下しているとかいうことではありませんので、あらかじめ誤解のないように確認をさせていただきたいと思います。

まず、牧口研究の最新の研究状況でございますが、『評伝　牧口常三郎』という本が今年、第三文明社から発刊されました。これは月刊『第三文明』に 2013 年から約 1 年半をかけて連載されたものです。本学の創価教育研究所が全面的に各種の資料を提供いたしました。編集委員会の方がそれを利用して書いてくださったものでございます。したがって現段階では、この『評伝牧口常三郎』が牧口研究のなかでは頭抜けて良いものになっています。いままでわからなかったことが全部わかりました。さっきも申し上げましたが、わからないことがわかってきたということなのです。わからないことがわかるというのはすごく大事で、わからないことがわかると、そこがわかれば良い訳ですから。どこがわからないかわからない、となると困るのですね。学生から質問されて、先生、これ、私どこがわからないかわからないです、と言われても答えようがないのですね。ですから、どこがわからないかがわかる、ということは研究がそれだけ進んでいるということになります。いままでわからなかったことがかなりわかってきました。この本は創価教育研究所の協力で、最新の資料に基づく論述がなされています。ですから、いままでいろいろなものが出ていましたが、これが一番優れたものと言って良いと思います。

それから、牧口先生ご自身が書かれたもの、これも色々なものが出ているのですが、第三文明社から『牧口常三郎全集』全 10 巻が刊行されています（以下、引用の際は『全集』巻数、と

略記する)。これは素晴らしい成果だと思います。本文も整えられていますし、それから一番良いのは注がついていまして、用語でわからないことについては、非常に詳しく分析をしています。それから、全体として一つ一つの牧口作品についての解説、解題がありますので理解を深めていこうとお考えの方は、こういう書物をお使いになったら良いのではないかと思います。現段階でのこれは牧口研究の最良のものと言っていいと思います。

僕もこれまで、夏季大学講座で牧口研究をやってきたのですが、この『評伝　牧口常三郎』が出たので今年が最後かなと思っています（以下、『評伝　牧口常三郎』については『評伝』と略記する)。「創価教育学会史」もこの本を読めば、いまの段階の成果は全部出ています。このなかで扱いきれなかったこと、わからなかったところが今日、お話しをしようとしている牧口常三郎と犬養毅との関係なのですね。『評伝』でもわからなかったことだから、やはりわからないのだろうなと思いながら、それでもちょっと違うことを提起できたらなと思って今日は準備いたしました。最良の研究の本が出ましたので、我々にとっては本当にありがたい成果になっています。学生たちにも勧めています。

『第三文明』では「創価教育の源流　第２部　戸田城聖」を連載していましたので、おそらく来年くらいにはまた『評伝　戸田城聖』というかたちで１冊の本が出ると思います。これを一つのベースにしながら、最終的には池田先生の評伝につながっていくのだろうな、とそんなように想像しています。いずれにしても、この本が出ましたので、もしご興味のある方はこの本をお読みいただくと牧口の誕生から少年時代、青年時代、そして、校長時代から始まって、最後の創価教育学会の会長として、牢獄に入りどういうような生涯を終えていったのか。こうしたことが明確におわかりいただけると思います。

さて、今日の講義の問題意識でございます。まず皆さんと共通の到達点みたいなものを確認しておきたい。そもそも、牧口と犬養についてのことを考えてみたいという発端についてです。

一つは、『創価教育学体系』の第１巻の巻頭にあります。ちょうど表紙と、ページの始まる間に、犬養の揮毫が掲げられています。

それから、一昨年、この夏季大学講座で「創価教育学会史序説（１)」を話させていただいた際に、「創価教育学会支援会」を取り扱いました。この「創価教育学会支援会」、これは後でご説明いたしますが、その設立の趣意文というのがありまして、どうして「創価教育学会支援会」をつくったのかと、その趣旨と理由が示されている文がございます。「賛『創価教育学』」というタイトルが掲げられているのですが、それを書いたのが犬養なのですね。なぜここまで犬養が、「創価教育学」、『創価教育学体系』の発刊に関わっていたのか。そして「創価教育学」というもの自体にどうして関心をもったのか。あるいは、当時政治家としてはトップレベルの人が、なぜ牧口との関わりをもとうとしたのか。こんなところに非常に興味がわきまして、これをちょっと知りたいな、というところがそもそもの発端でございます。

それで、『創価教育学体系』の初版本を見てみましょう。初版はなかなか手に入らなかったのですが、創価教育研究所で各種のネットワークを使って手に入れました。これが先ほど申した『創

価教育学体系』の初版の巻頭に掲げられている犬養の文字です（図１参照）。

私自身は経済学部で日本経済史を専門にしております。じつは牧口研究は、二番目の研究課題です。一番目の研究課題は、江戸時代の農民の研究をしているのですね。ですから資料としては古文書を読まなくてはならない。古文書というのはご存知のように墨字で書いて、読める方もいらっしゃるでしょうし、読めない方も多いと思うのですが、墨字書かれた文字を読むことが仕事です。ここに書かれてある犬養の文字も一応、読んではみたのですが、読みづらい文字がいくつかあります。それ以外の読み方がない、という推測で判断した文字もあります。ただ「犬養毅題」と書いてありますので、これは紛れもなく犬養の文字である。多方面の方々にお聞きしても間違いないであろうという。「天下」の文字はわかりますね。その下は「無」です。次の字は読みかたとしては「不」という字なのですが、文字だけみると、どうも「不」に見えない。これ「不」と読んでいいのだろうか。色々検討した結果としては、「あらず」と読むのがいいのだろうということに落ち着いたのですが、疑問が多少残っています。

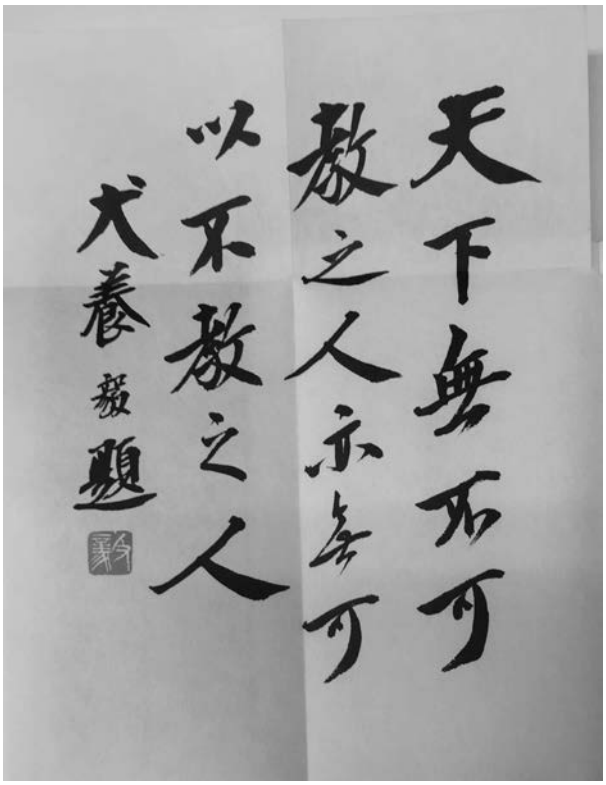
「天下無不可教之人 亦無可以不教之人」

この読みかたは、

「天下に教ふ可＜べ＞ からざるの人なく　また以て教えざるべきの人もなし」

と、こう読み下すのですね。

図１　『創価教育学体系』初版の巻頭箴言（犬養毅書）



現代語訳は以下のようになります。

「天下に、教えなくてもよいような人は存在していない」

天下というのは、世の中にというようなニュアンスだと思います。世の中に教えなくてもいいような人はいない。存在していない。また、教えないほうがいいような人も存在していない、ということですね。犬養がこの『創価教育学体系』の発刊に際して、教育ということ、教えるということ、これはすべての人にとって不可欠なことだ、というような意味を込めて書いたのだろうと考えられます。

この文は犬養のオリジナルなのか、犬養が考え出した文言なのかということもあって、このことについても、色々な方々にご相談をいたしました。この点について『評伝』の 325 ページから 326 ページには、次のように載っています。

「天下に教えなくてもよいような人は存在していない。また、それは、教えないほうがよいような人も存在していない」

これが犬養のオリジナルなのかどうかということで、本学の書道の先生で、中国の古典に非常に詳しい小山満教授にお聞きしましたところ「王守仁」、僕たちには「王陽明」というほうがたぶん有名だと思うのですが、陽明学という学問を展開した人です。この人の「象詞記」のなかに、「天下にかわる可＜べ＞ からざるの人なし」。世の中にピンチヒッターになって自分に代わる人がいるのかというと、それはいない。自分は自分でしかない。そういうような文章があるそうです。天下に変化しないような人は存在しない。自分に代わる人はいないし、自分で生きていくなかで絶えず変わっていくのだ。絶えず変化していく。変化していかない人はいない、という趣旨の文章があるそうです。これをもとに犬養が考えたのではないか、というのが小山先生の説です。いろいろと調べてみたのですが、僕自身も中国の古典に全く詳しくないので、これ以外にはなかなか見つかりませんでした。ですから、とりあえず今日の段階までは、オリジナルなのか、それともなにか原型があってそれを犬養自身が自分の考えでそれをベースにしながら書いたのか。その結論は下すことができません。

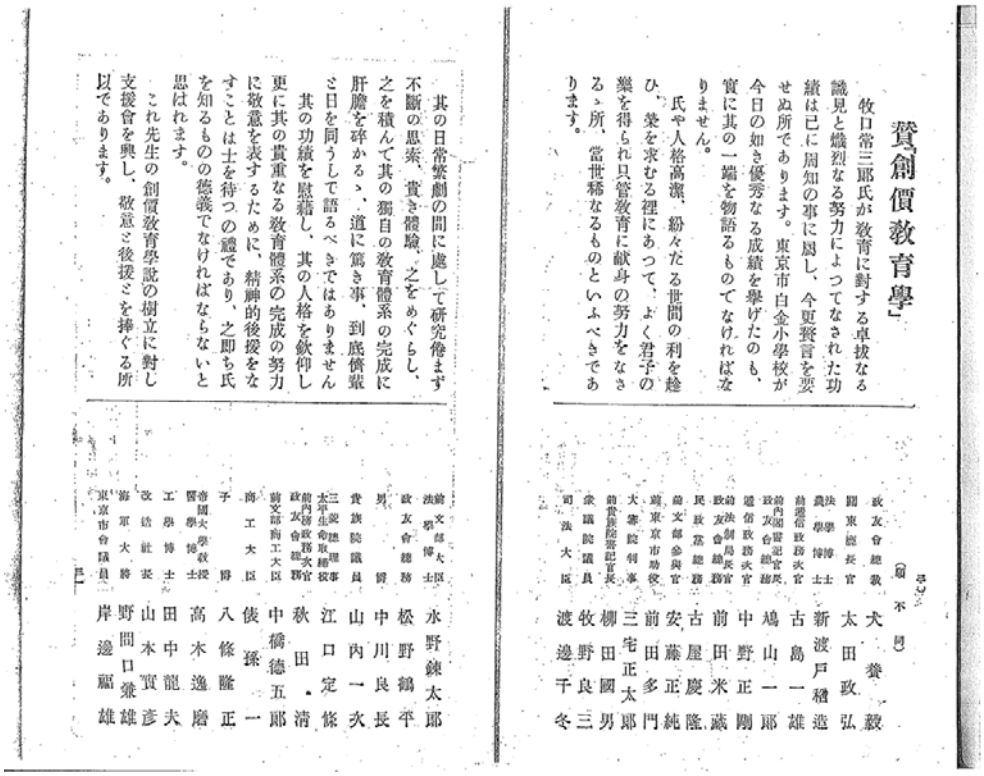
続きまして、もうひとつ「創価教育学支援会」趣意文の「賛『創価教育学』」ということですね。この文章を犬養が書いたということですが、これが原本です（図２参照）。

『環境』という雑誌を牧口が発刊しておりまして、その第１巻の第９号、1930 年 11 月に発刊されているものです。『創価教育学体系』が 1930 年 11 月 18 日発刊ですから、それと同時期に出されているということです。ここに書かれている「賛『創価教育学』」と、その下に、「創価教育学支援会」の名簿が載っています。

まず、この犬養が書いたとされている「賛『創価教育学』」を少しゆっくり読みながら、犬養が『創価教育学体系』が出たときに、あるいは「創価教育学」という理論を世の中に出す時に、何をどのように考え、応援しようとしていたのか。なにを称えようとしていたのか考えてみたいと思います。

「牧口常三郎氏が教育に対する卓抜なる識見と熾烈なる努力によってなされた功績は已に周知

図２　「創価教育学支援会」の趣意文（『環境』第１巻第９号、1930年11月発行）



「贊創價教育學」

牧口常三郎氏が教育に對する卓拔なる識見と熾烈なる努力によつてなされた功績は已に周知の事に屬し、今更贊言を要せぬ所であります。東京市白金小學校が今日の如き優秀なる成績を擧げたのも、實に其の一端を物語るものでなければなりません。

氏や人格高潔、紛々たる世間の利を趁ひ、榮を求むる裡にあつて、よく君子の樂を得られ只管教育に献身の努力をなさるゝ所、當世稀なるものといふべきであります。

其の日常繁劇の間に處して研究倦まず不斷の思索、貴き體驗、之をめぐらし、之を積んで其の獨自の教育體系の完成に肝膽を碎かるゝ、道に篤き事、到底儕輩と同うして語るべきではありません

其の功績を慰藉し、其の人格を欽仰し更に其の貴重なる教育體系の完成の努力に敬意を表するために、精神的後援をなすことは士を待つの禮であり、之即ち氏を知るものの德義でなければならないと思はれます。

これ先生の創價教育學説の樹立に對し支援會を興し、敬意と後援とを捧ぐる所以であります。

（順不同）

政友會總裁　犬養毅
關東廳長官　太田政弘
法學博士　農學博士　新渡戸稻造
前遞信政務次官　古島一雄
前內閣書記官長　政友會總務　鳩山一郎
遞信政務次官　中野正剛
前法制局長官　政友會總務　前田米藏
民政黨總務　古屋慶隆
前文部參與官　安藤正純
前東京市助役　前田多門
大審院判事　三宅正太郎
前貴族院書記官長　衆議院議員　柳田國男
衆議院議員　牧野良三
司法大臣　渡邊千冬

前文部大臣　法學博士　水野錬太郎
政友會總務　松野鶴平
男爵　中川良長
貴族院議員　山内一次
三菱總理事　太平生命取締役　江口定條
前內務政務次官　政友會總務　秋田清
前文部商工大臣　中橋德五郎
商工大臣　侯爵　俵孫一
子爵　八條隆正
帝國大學教授　醫學博士　高木逸磨
工學博士　田中龍夫
改造社長　山本實彦
海軍大將　野間口兼雄
東京市會議員　岸邊福雄

の事に属し、今更贅言（ぜいげん）を要せぬ所であります。」

「贅言」というのはよけいな言葉という意味です。牧口が様々なかたちで教育に対してこれまで行われてきた功績については、皆さまよくご存知だと思いますし、いまさらこれにつけ加える言葉はありません。

「東京市白金小学校が今日の如き優秀なる成績を挙げたのも、実に其の一端を物語るものでなければなりません。」

ちょうど白金小学校の校長をしていた時で、牧口が校長になってから白金は東京のなかでも有数の小学校になっていきました。それは様々な試みを牧口がしたからなのですけれども、その結果として評判をとりました。模範校になったようです。それをここで称えています。

「氏や人格高潔、紛々たる世間の利を趁（お）ひ、栄を求むる裡（うら）にあって、よく君子の楽を得られ只管（しかん）教育に献身の努力をなさるゝ所、当世稀なるものといふべきであります。」

牧口の人格は高潔で、世の中ではいろいろなことに振りまわされたり、自分の名誉や利益、栄誉を求めている。そういうようなことが世の中ではあるのだけれども、そのなかにあって教育に対して全身全霊を込めて努力をしているのは、現段階では稀にみるものだと称えています。

「其の日常繁劇の間に処して研究倦まず不断の思索、貴き体験、之をめぐらし、之を積んで其

の独自の教育体系の完成に肝胆を砕かるゝ、道に篤き事、到底儕輩（せいはい）と日を同うして語るべきではありません。」

日常の教育現場で、校長として非常に忙しい日々を送っていたが、そのなかにあって研究を絶えず行い、そして教育体系、まさに理論というものを完成した。それは非常に素晴らしいことで、ほかに語るような例はない。

「其の功績を慰藉（いしゃ）し、其の人格を欽仰し更に其の貴重なる教育体系の完成の努力に敬意を表するために、精神的後援をなすことは士を待つの礼であり、之即ち氏を知るものの徳義でなければならないと思はれます。これ先生の創価教育学説の樹立に対し支援会を興し、敬意と後援とを捧ぐる所以であります。」

つまり、それだけの功績を心から喜び、また称え、その人格を仰ぎ見て、貴重なる体験でまとめられた教育体系の完成をともに喜び、それに対して敬意を表したい。精神的な後援をするのは当然だけれども、それ以外の部分でも実際には支援をしていきたい。経済的な支援を含めてですね、創価教育学説の樹立に対し支援会を興し、敬意と後援とを捧げる所以である。こうしたことが書かれています。だから、牧口先生自身の教育に対する姿勢と人格と、それから牧口が行ってきた教育の実践というものに対して、犬養をはじめ支援会に参加する人たちは、それに賛同し、それに敬意を表し、称えたい。こうした理由によって「創価教育学支援会」がつくられたことが、この文言から察することができると思います。

次は「創価教育学支援会」のことですけれども、「創価教育学支援会」の設立にあたってどういう人が名前を連ねているのか。ここに記載されている人は、合計 28 名いるのですが、そのトップに「政友会総裁　犬養毅」の名前が出てきます。ですから、支援会のまさに中心者、発起人のなかでも中心的な存在といえるでしょう。これについては、興味がそそられてくるわけです。私もこうしたことが要因で、犬養の調査・研究をしてみようかなと、一昨年ぐらいから考えはじめ、今日、こういうかたちになりました。

「創価教育学支援会」の会員名は、犬養の後、「関東庁長官の太田正弘」、それから法学博士・農学博士の新渡戸稲造ですね。北海道師範学校に牧口が通っていたころから、徐々につき合いが始まったようです。現在の北海道大学の総合博物館には、新渡戸博士のコーナーがあるのですが、そのなかの友人の名前の一覧に、牧口常三郎の名前が載っています。ですから、新渡戸との関係はかなり深かった。牧口にとっても非常に重要な人だったということがわかります。

それから、前逓信政務次官の古島一雄。この古島という人はあとでキーパーソンになります。研究してみて初めてわかりましたけれども、古島という人は牧口と犬養の間の重要なキーパーソンになってくる人です。前内閣書記官長・政友会総務、鳩山一郎。この鳩山一郎という人はご存知だと思いますが、先般、民主党の党首をやっていました鳩山由紀夫さんの御祖父さんにあたる方ですね。それから、逓信政務次官、中野正剛。前法制局長官・政友会総務、前田米蔵。民政党総務、古屋慶隆。前文部参与官、安藤正純。それから、前東京市助役の前田多門。前田多門もあとで絡んできます。大審院判事、三宅正太郎。前貴族院書記官長、柳田國男。皆さんよくご存知

の民俗学の泰斗で、牧口が神奈川・津久井周辺の郷土の研究を一緒にやった郷土会というのがあります。新渡戸、柳田、牧口等が参加した一つの研究会だったのですが、親しくつき合っていました。『創価教育学体系』の「序」は柳田が書いていますので、つき合いは非常に深かったということがいえます。衆議院議員の牧野良三。司法大臣、渡邊千冬。それから前文部大臣・法学博士の水野錬太郎。政友会総務の松野鶴平。男爵の中川良長。貴族院議員、山内一次。三菱総理事・太平生命取締役、江口定條。まだ続きまして、前内務政務次官・政友会総務の秋田清。前文部商工大臣、中橋徳五郎。商工大臣、俵孫一。子爵の八條隆正。帝国大学教授・医学博士の高木逸麿。工学博士の田中龍夫。改造社長の山本実彦。海軍大将の野間口兼雄。東京市会議員の岸辺福雄。これで全員です。

これを職業別といいますか、業界別で分けてみました。政治家と国家官僚が合計 19 名になります。29 名中の 19 名ですから、おおよそ３分の２くらいになるでしょうか。政治家と国家官僚が「創価教育学支援会」に入っているということです。

それから、教育者・研究者は新渡戸、高木、田中です。柳田國男の肩書きが官僚になっておりましたのでこちらに入れていますが、柳田國男は教育者・研究者に入れても良いかもしれません。肩書きで分けましたが、実際としては色々な分野に股をかけている人もいるということですね。当時の政治家というのは、実業家であったり、研究者であったりという人もいます。一概に現在の政治家のような、職業としての政治家というような人はおりません。ですから、分類が難しいのです。今回は便宜的に、ただ単純に「創価教育学支援会」のその名簿に載っていた役職に基づいて分けたにすぎません。裁判官・司法関係者が１名、実業界が２名いました。軍人が１名、その他が２名ということで全体としては当時の状況から言いますと、主に政治家や官僚で構成されていたということになります。なぜ「創価教育学支援会」が、政治家や官僚によって支えられるような会だったのか、ということが今度は問題として浮かび上がってきますね。これについてはどこかで考えなければいけない。ただ、難しいです。これもまた当時の状況を考えながら分析しなくてはいけません。

それで今日の問題意識です。今日の講義の到達目標について、何をやろうとしているのかというと、一つは牧口常三郎と犬養毅はいかなる関係だったのだろうか。これが知りたいということです。それから、犬養毅はどうして『創価教育学体系』の巻頭に揮毫を贈ったのか。どうしてそういう関係性になったのかということ。具体的な話なのですけれども、これがわかればいいなと思って始めました。問題意識は以上です。これが解決つけばいいですけどね。解決がつかなければもち越さなくてはならない課題になります。この二つが課題です。

２，犬養毅の生涯

まず、犬養毅はどういう人だったのかということです。そこで犬養の家系を調べてみました。

犬養の息子である犬養健は、政治家を継いで法務大臣になっています。それから、先般亡くなられた、エッセイストとして人気のあった犬養道子さんは、この犬養健の娘さんですので、犬

養毅からすると孫にあたるわけですね。なかなか創価大学では言いにくいのですが、当時は正妻とおめかけさんっていうのですか、昔の政治家は正妻ではない方を持っていて、この人との間で生まれたのが安藤和津さん。この方も犬養毅の孫にあたります。この安藤さんが結婚したのは奥田瑛二さんという俳優さんです。

注目したいのは緒方貞子さん。日本で初めて国連高等難民弁務官事務所の所長として活躍された方ですが、緒方さんは犬養毅の娘さんの娘の子、つまり孫の子どもにあたるので、犬養が曾祖父にあたります。さらに、犬養毅の息子である健さんは、幕末に活躍した土佐の後藤正二郎の孫と結婚しています。犬養道子さんは犬養毅と後藤正二郎の DNA がつながっていたということになります。全体を見わたすとかなりの家系です。これが犬養の概要です。いま犬養のことを知るには、たとえば犬養道子さんや緒方貞子さんの考えかたなどに、多少残っているのではないかなどと推測しております。

次に簡単ではありますが、犬養毅の生涯を辿ってみたいと思います。

まず、生まれは安政２年、1855 年４月 20 日です。安政２年というのは、まだ幕末です。ペリーが浦賀に来航したのが 1853 年です。ペリーが浦賀に来航した後、条約の締結があったのですが、犬養が生まれた３年後の 1858 年に日米修好通商条約が結ばれます。その前に結ばれたのは 1854 年、生まれた前年に日米和親条約が結ばれています。日米和親条約で日本は開国します。諸外国の船が日本に着いたときには船の燃料である薪炭、それからもっとも大事な水、これを提供するということですね。そのために、諸外国の船が港に寄ることを承認しました。この時はただそれを与えるということだけだったのですね。1858 年に結ばれた日米修好通商条約というのは、完全に貿易を始めることを約束しました。これを日本の開港と定義づけしています。その日米修好通商条約というのは皆さんお聞きになったことがあると思いますが、不平等条約と呼ばれるもので、治外法権と関税自主権が認められていない。そうした内容でありながら条約が結ばれていく段階ですので、日本が世界の色々なものに巻き込まれていく。それまで平和だった徳川時代が少しずつ揺らいでいく。そういう時に生まれたわけですね。備中、現在の岡山県に「庭瀬藩」という藩があって、その藩の郷士、侍ですね。次男として誕生しまして幼名が仙次郎。なかなか優秀だったようで、三余塾に 11 歳のときに入塾します。三余塾からはかなり色々な方が出ていまして、当時この地域では有名な塾だったようです。犬養松窓という有名な学者ですが、この人から漢学を学んでいます。ですから漢学については非常に造詣が深いです。先ほど掲げました『創価教育学体系』の揮毫は、漢学・漢文の素養がないと書けない文言、書けない文章だと思われますが、すでに十代の段階からじっくりと取り組んでいたようです。犬養の著書を読みますと、漢詩をかなり作成しています。漢学についてはかなり造詣が深かった。

明治８年、徳川幕府から明治政府の段階になっていましたが、21 歳で上京し『郵便報知新聞』に寄稿いたします。これがいわばジャーナリストとしてのはじまりです。彼がジャーナリストとして名を馳せるのはその後ですが、その前に慶應義塾に入塾しています。まだ大学ではありません。つまり福澤のもとで勉強したいということで慶應義塾に入塾しております。明治 10 年、皆

さんご存知のように西郷隆盛が不満をもった若い武士たちと、若い藩士たちと薩摩で立ち上がり、明治維新政府に対して抵抗した。西南戦争です。いってみれば明治維新段階でのもっとも大きな内乱の一つですが、この西南戦争に犬養は記者として従軍しております。「戦地直報」を『郵便報知新聞』に連載いたしました。その記事が非常に良い文章だったようです。それで彼は名前を高めたようです。一緒に戦おう、と軍隊に誘われたようですが、彼はそれを頑なに断っています。ジャーナリストとして従軍するという決意が固かったと思われます。このころ旧幕臣・栗本鋤雲に親しくつき合うことがあって、「木堂」という号を与えられました。「犬養木堂」という名称は聞いたことがおありかと思いますが、20 代のときに与えられた号、呼び名になります。これは、五百旗頭先生の「犬養毅」という論文の一説から学んだことです（五百旗頭薫「犬養毅」・筒井清忠編『昭和史講義３』ちくま新書、108 頁）。

さらに 27 歳の時に初めて官僚としての仕事をします。統計院権少書記官という役職でした。どのような経過で、この役職に就いたかというと、彼が師事していたのが大隈重信です。早稲田をつくった大隈ですけれども、大隈を非常に慕っていたのですね、犬養は。大隈が内閣をつくり、その段階で犬養を官僚としてひき抜いた。これが 7 月でした。ところが明治 14 年、1881 年というのは経済史や政治史のなかで「明治 14 年の政変」と呼ばれることで、一気に内閣が覆されて当時の内閣関係者は一斉に更迭されました。そして、今度は長州と薩摩の勢力が大隈に替わって政治を執るというかたちになっていきます。「明治 14 年の政変」については研究が進んでいまして、憲法の制定について大隈と伊藤博文の間での意見がなかなか一致しなかった。そのために伊藤がしびれをきらして大隈を更迭したという説。それから大隈は新しい国家をつくるのに、どちらかというと積極財政を試みた。色々なかたちでお金をばら撒く、といってはなんですけれども、紙幣を発行してさまざまな産業を興していこうという政策をとった。しかし伊藤をはじめとする勢力は、これ以上お金が巷に出回わるとインフレーションが進んでしまう。そうなると国家の収入が実質的には減っていくから、これはだめだ。いったん、出回っている紙幣を回収してデフレーション政策にしなければ国家の財政がもたない。つまり、どちらかというと消極策。この二つがぶつかり合って、最終的には伊藤の勢力が権力闘争に勝って大隈を更迭した、などの説があります。犬養は、大隈と政治行動をともにするということで、この「明治 14 年の政変」で下野することになります。ですから、初めての官僚の仕事はわずかの期間だったということです。

明治 15 年、下野した大隈が立憲改進党という政党をつくります。立憲改進党に犬養も参加しまして、このときに尾崎行雄も参加します。尾崎行雄についてはあとで説明しますが、今後二人は盟友関係になっていきます。

犬養の初の政治家としての足場は、明治 15 年の東京府会議員補欠選挙。芝区が選挙区ですが、これに出て当選いたしました。五百旗頭先生によりますと「政党政治家としての歩みが始まる」（五百旗頭、前掲書、110 頁）。政党というのは明治になってからできたもので、いまは様々な政党があって政党中心に政治が動くことが当たり前ですが、当時はそういうかたちではありません。徐々に政党がつくられていきます。その発端になったということですね。

明治23年、犬養が36歳のときに明治政府の懸案であった帝国議会が初めて開設されました。国会議員というのが日本の歴史上初めて登場してくる。この段階で先ほどの府議会議員を退任いたしまして、7月におこなわれた第1回衆議院議員選挙に岡山県第3区に立候補し当選。改進党院内団体に所属して、彼は政治家の道をさらに一歩進めていくことになりました。生まれ故郷の岡山が彼の地盤になっていきます。

38歳のときに第2回衆議院議員選挙に当選し、40歳のときに第3回選挙に当選しています。非常に強い候補だったようです。他を寄せつけない候補で、なかなか人気もありましてね、素晴らしい政治家だったという人が多いです。当然プラスマイナスはあって、批判する人もたくさんいました。犬養は政党政治家として歩んでいくのですが、どういう政党に所属していたのか一度整理してみようと思います。

立候補した時は、大隈がつくった立憲改進党に所属していました。その次に、中国進歩党（1894/5/4-1896/3/1）に所属します。これは聞いたことのない党だったので調べてみたら、岡山県中心の地域政党なのですね。その代表者になっています。地域政党です。都民ファースト、大阪維新の会みたいなものですね。地域のなかの政党を犬養がつくったわけです。その党に所属しています。中国進歩党が進歩党（1896/3/1-1898/6/20）に吸収合併されていくわけです。その大きな政党のなかで総務委員となりました。この時期からどんどん頭角を現していきまして、政党の中心的なメンバーになっていきます。進歩党が次は憲政党（1898/6/22-1898/10/29）になります。憲政党がつぶれて憲政本党（1898/11/3-1910/3/13）になります。さらに憲政本党が分裂して立憲国民党（1910/3/14-1922/9/1）になります。立憲国民党がさらにまたくっついたり離れたりして、革新倶楽部（1922/11/8-1925/5/10）ということになっていきました。1925年5月10日ですから、昭和が始まるくらいの段階で立憲政友会（1925/5/14-）に所属します。これが先ほど「創価教育学支援会」に出てきた「政友会」という会ですね。この「政友会」に所属をしていくという、こういう流れになりました。

犬養はずっと政党のなかに所属をしながら政党の運動のなかで政治をやる、そういう政治家だったようです。そうじゃない流れも、もちろんありました。たとえば伊藤とか、長州閥から出てくる政治家たちです。当時は、元老と呼ばれる人たちが、内閣総理大臣を推薦するのですね。現在のように、選挙で選ばれた人から積み上げていって内閣総理大臣になるのではなく、元老たちが集まり意見を聴取してまとめ、それを天皇に進言して天皇が任命するというかたちになります。この元老のグループは、言うまでもなく政党ではないのですね。ただし、このなかでも伊藤博文は政党が重要だということで、自ら政党をつくろうという動きを見せます。しかし、伊藤が政党をつくろうとすると他の元老が、政党政治というのは亜流だ、政党をつくってどうするのだ、といった対立があったりしました。ですから、近代日本が一つの国家として成り立っていくときのリーダーたちが右往左往しながら、試行錯誤しながら政治を運営していこうとした。そのなかの一員が犬養だったということができると思います。

ただし、犬養は明治から大正にかけては、政権を担うようなグループを仮に主流だとすれば、

けっして主流を歩いてはいません。どちらかというと亜流。もう少し政治的な言いかたをすると、与党と野党と分けますと、与党のグループには入っていない。どちらかというとずっと野党の道を歩んでいます。ただ時折、大隈重信が内閣総理大臣になったときには官僚として入るときもあるのですが、全般的に与党として過ごす期間よりも、野党として過ごした期間のほうが長い、そういう政治家です。

もう一つ、犬養の名称として「憲政の神様」とよく言われるのですね。この「憲政の神様」という呼びかたは、尾崎行雄とともになされます。なぜ「憲政の神様」と呼ばれたのかというと、憲法というものをとにかく護持するのだ、護っていくのだ。憲法にもとづいて政治は行われなければならない、ということを非常にわかりやすく一般大衆に訴えた人だったからですね。一般に「護憲運動」と申しますが、護憲運動がはじまった発端は、大正元年、犬養が 58 歳のときです。元老の西園寺公望が内閣総理大臣になったのですが、西園寺内閣が崩れたときに、内大臣という天皇の身の回りのことをやる、今でいう宮内庁にあたるような、その中心的な存在が桂太郎だったのです。桂太郎が内閣を組閣しました。この点が問題視されました。というのは、桂自身が天皇からの詔勅を受けたことにして、自己の政治的野心のために天皇を利用して、自分の内閣をつくったのではないか。世論は、桂による不正があったのではないかということで、一種の騒ぎになった。天皇の下命がそもそもクリアではなかった。従いまして、それでは憲法を護っていないことになりはしないか、ということで紛糾しました。桂が長州出身だったことから長州閥所属ということで、「閥族打破」そして「憲政擁護」を標語にした憲政擁護会が結成され、犬養はその先頭に立って「護憲運動」を展開した。

尾崎と犬養が日本全国を回って、この憲法を守ろう。桂のやりかたはおかしいということで、その批判のための運動を展開したのですね。東大で教鞭を執った有名な先生である岡義武先生の研究、『近代日本の政治家』に書いてあるのですが、犬養が演説会で護憲の演説をすると、観衆が大拍手、大喝采だったそうです。一番の褒め言葉が、「脱帽、脱帽！」と声を上げるそうなのです（岡義武『近代日本の政治家』、岩波現代文庫、199 頁）。脱帽、脱帽とどこへ行っても大歓声がわいた。まさに政治家としては人気絶頂のときなのですね。当時は普通選挙が始まっていませんでしたので、選挙に携われない人たちや女性たちから、大変に人気があったようです。

犬養はこの頃から徐々に青年教育に重点をおくようになっていきます。大正２年に彼は「大日本青年協会」をつくって、その会長に就任しています。機関紙『青年』を発行します。この機関紙『青年』を調べてみたら、大正２年 12 月から大正７年 11 月まで、およそ５年間発行されていました。何のために犬養がこうした青年の団体をつくったのかと言いますと、青年の政治的な関心を高める、青年による政治活動を活性化させたい。なぜかならば、次の時代を担うのは青年で、青年が政治に対して関心をもって政治のことを考えていかなければ、世の中は変わらないだろうと。まさに青年に次の時代を担ってもらうことを意図してこれをつくったようです。

さらに、各地に「木堂会」、犬養の号を用いた「木堂会」を結成いたしました。大正２年４月 13 日に京都で初結成です。この「木堂会」という名前をつけるときも、こんな私の名前をつけ

ることは恥ずかしい、と言いながら青年たち、あるいは関係者たちに言われて「木堂会」と名称を決めたようです。これは、創価大学文学部教授で大正期の政治については日本でトップレベルの研究者である季武嘉也先生の『大正期の政治構造』（吉川弘文館、1998 年）から教えていただきました（239-241 頁）。

３，牧口と犬養

明治 23 年および明治 25 年、犬養が 36 歳･38 歳のとき、牧口はどのような状況であったのか。牧口は明治 4 年の生まれです。1890 年帝国議会が開設されたころは、まだ北海道の尋常師範学校の学生です。教員を目指して一生懸命勉強していた時期ですね。その時期の日本は、憲法を中心にして近代国家のかたちを徐々につくり上げていた時代です。その段階で牧口は、まさに師範学校で教員を目指して一生懸命に勉強していた。

それを経て、大正 14 年頃は、教員として校長として活動していた時期にあたります。牧口が校長としてもっとも脂がのった時期といえましょう。1871 年生まれですので、牧口は 54 歳。この時期の犬養は、逓信大臣を辞任します。衆議院議員も辞任します。世の中に対して政界から引退するということを明確に表明したのですね。犬養の引退について、当時、世の中はすごく紛糾したみたいです。なぜ辞めるのだということで。特にもめたのは犬養の地盤、岡山。犬養が辞めるなどというのはとんでもない、ありえない、と言いましてね。犬養の許可を得ないまま、補欠選挙に犬養を立候補させていまいました。本人はぜんぜんそんなこと思っていないのですけれど、後援会とか皆が勝手に手続きしてしまったのです。ですから、まったく選挙運動等は行われていません。まさに、本人に無断で届け出ました。そうして選挙をやったのです。そうすると当選してしまった。長野県に富士見というところがあるのですが、犬養はその「白林荘」というところに隠居生活をしたい、と。自分は政治をやめてゆっくりそこで過ごしたい。むしろ青年の教育に余生を注ぎ込みたいと本人は言っていたそうであるにもかかわらず、地元の方たちが無断で選挙に立候補させてしまった。犬養はその結果を聞いて、仕方なく引き受けたというかたちになりました。本人は信州富士見の別荘で色々なことをしていたということです（五百旗頭､前掲書、122 頁）。

『創価教育学体系』が出版される段階に入ります。昭和３年、犬養は 74 歳でさらに次の第 16 回の衆議院議員総選挙で当選しました。75 歳、1929 年、『創価教育学体系』が発刊される前年の 10 月に、政友会の臨時大会で総裁に就任しました。総裁に就任をするということは、政友会が選挙で勝って第一党になると必然的に総理大臣になる、というような流れができる。なぜ、そのように言うのかというと、この段階ではまだ天皇からの任命ですから、確定はできませんが、そういう流れができるような立場になってしまったということです。

昭和５年、『創価教育学体系』が発刊された 76 才の時も、犬養は選挙で当選しまして、翌年、犬養の内閣が成立しました。すなわち､犬養が内閣総理大臣になった。77 歳の時です。ですから、『創価教育学体系』が発刊されて､「創価教育学支援会」の「賛『創価教育学』」を書いて公表し

ていた時期の翌年に、内閣総理大臣になったということなのです。人生ってわからないですね。いつどこでどうなるかわからないということが、この人、犬養の人生をみているとよくわかります。若い頃は良かったからといって老人になってから良いとは限らないし、若い頃は不遇だったからといって老人になってから良くなる可能性もあるということですよね。歴史を勉強していると、こうしたことがおもしろいのです。

昭和７年、犬養 78 歳。選挙で政府与党空前の大勝です。犬養が率いた政友会が大勝利をしたのですね。それが一つの引き金になって、５月にいわゆる歴史上の「5.15 事件」が起きました。軍隊の若い人たちがクーデターを起こし、首相官邸に踏み込んでいったのですね。そのとき犬養は自分の書斎で座っていた。入ってきた将校たちに「待て、話せばわかる」と言った。将校たちはそれを見たとたんに拳銃の引き金が引けなかったのですね。「話せばわかる」と対峙していたところに後から来たグループ乗り込んできて、そのメンバーが撃って犬養にあたった。すぐさま病院に連れて行かれたけれど命を落とす、ということでございます。19 日に首相官邸で党葬が行われた。これが犬養の人生でした。

この人がなぜ牧口と関係しているのかということで、牧口は犬養をどう見ていたのか、どのように犬養のことを語っているのか、ということで調べてみますとこういうような文言が出てきました。

「初めて創価教育学の発表をなすや、直ちに異体同心の関係にある当時の内閣総理大臣犬養毅氏に紹介して、賛意を巻頭に表せしめられたことは、古島氏の普通ならざる尽力に基づく」（『全集』８巻、26 頁）。

こういう文章が出てくるのですね。厳密に年表を開いてみると、内閣総理大臣は時期が１年ずれているわけですが、政友会の総裁ではあった。

「古島氏の普通ならざる尽力に基づく」。この古島氏というのは「創価教育学支援会」で出てきた古島一雄という人のことです。あとで詳しく触れます。さらに、

「時の鳩山文部大臣が先づ師範教育の改革から着手せんとしたこと等も、犬養首相の教育政策に深い根柢のあったことを物語るものであった。之は第三巻の発表に当って犬養氏が再び著者に賛意を寄せられたのでも察せられると思ふ。然るに不幸、それから二ヶ月にして不慮の災難に倒れられたのは、教育改革のためにも真に惜しむべきである」（『全集』８巻、26 頁）。

このように牧口が犬養のことを書いているのですね。これは『創価教育法の科学的・超宗教的実験証明』という牧口の著作の中にある記述です。この著作は、『全集』第８巻に載っています。『実験証明』と略称しますが、『実験証明』は 1937 年、昭和 11 年９月に発刊されています。したがって、『創価教育学体系』が発刊されてから６年後の著作になりますが、これは牧口最後の単行著作になっています。この『実験証明』の中身なのですが、僕はまだ詳しく分析していないのでなんとも言えないのですが、牧口が考えていたことのエッセンスが書かれていたと思います。つまり、創価教育学の完成段階ですので、たとえば法華経、創価教育学と日蓮仏法、それがどのように関連しているのか。創価教育学というものの核はいったいなにか。そして、彼が求めた信

仰、これは一体いかなるものであったのか、というようなことがすべて書いてあります。創価大学の教授で、もういまは亡くなられてしまったのですが、牧口研究の第一人者であった齋藤正二先生という方がいらっしゃいました。この方は実際には、日蓮仏法を信仰しているわけではないのですね、研究者です。研究者なのですが、牧口のことをよく理解していました。齋藤先生が、「牧口教育思想の全体系を一つに絞りあげた全体帰結」（『全集』８巻、475 頁）という評価を『実験証明』に与えていて、この「『実験証明』のごとき超一大傑作著述」という文言で、牧口の全著作なかにおける『実験証明』の位置づけをしています（『全集』８巻、486 頁）。

齋藤先生は『牧口全集』の総責任者と言っていい方なのですが、この『実験証明』については『牧口全集』第８巻のなかに組み込まれています。第８巻の一部になっているのですが、『実験証明』だけで一つの巻をつくってもいいのではないか、というくらいに牧口にとって非常に重要な、また牧口研究にとって重要な著作であるとおっしゃっているのです。重要な著作なのですが、そのなかで牧口の犬養評が出ているのですね。まず、これを分析していかなければいけないだろうということで、『実験証明』のなかに書かれている牧口の犬養に対する評価を取り上げてみましょう。最後の部分に出てくる文章です。

「之は第三巻の発表に当って犬養氏が再び著者に賛意を寄せられたのでも察せられると思ふ」。

「第三巻の発表に当たって」。この第三巻というのは『創価教育学体系』の第三巻です。『創価教育学体系』は、当初牧口の構想によると、五巻本になっていたようです。我われがよく言う『創価教育学体系』の発刊、それから創価教育学会の結成、発起というのでしょうか、創価教育学会が始まった、いわゆる創立記念日。これは昭和５年 11 月 18 日ですが、この日が第一巻の発刊された日です。第二巻、第三巻はその後順次発表され、公刊されていくわけで、第三巻が出たときに、犬養が書簡を送ってくれたという。

犬養書簡は、次のとおりです。

「敬啓貴著創価教育学体系御恵贈下御厚意難有奉存候」

あなたの優れた著書である『創価教育学体系』をお贈りいただきまして、そのご厚意に対して心より御礼を申し上げます。

「貴氏ニ鳴謝并文安を禱候　不具」

あなたに対してできる限りの感謝を述べて安穏と健康を祈ります。

「三月十一日　犬養毅　牧口常三郎殿」

牧口が書いている「第三巻の発表に当って犬養氏が再び著者に賛意を寄せられた」というのが、この犬養書簡ということになります。日付は 1932 年、昭和７年３月 11 日付ですから、「5.15 事件」を考えますと、おおよそ２ヶ月前の犬養の書簡ということになるわけです。こういうような書簡を指して牧口は好意と言っています。

それから分析の二つ目といたしまして、古島氏とは誰のことでどのような関係があったのか。

「初めて創価教育学の発表をなすや」と書いてありましたが続いて、「犬養毅氏に紹介して、賛意を巻頭に表せしめられたこと」。つまり、巻頭の揮毫を犬養に依頼し、犬養が応じてくれた。

その要因はどこにあるかというと、「古島氏の普通ならざる尽力に基づく」。こう書かれているのですね。ですから、これは古島一雄が犬養と牧口の間を取りもった、ということが想定できます。

古島一雄。この方は 1865 年に生まれて 1952 年に亡くなりました。第二次大戦後まで生きていた方ですね。牧口が 1871 年の生まれですので、牧口よりも 6 歳年上の人です。この方はジャーナリストです。雑誌『日本人』、『九州日報』、『万朝報』などの記者を経て、明治 44 年に衆議院議員に立候補しました。これは有名な話ですが、一貫して犬養の側近です。犬養の側近としてずっと犬養と行動をともにしました。犬養が辞めれば一緒に辞める、犬養が入れば一緒に入る。この人は最終的にはどういうような立場だったかというと、第二次世界大戦後に総理大臣であった吉田茂、その吉田茂の相談役です。だからどちらかというと吉田茂の師匠格に当たる方です。吉田茂を師匠にしたのが池田勇人、佐藤栄作などですね。いまの総理大臣の安倍さんのお祖父さんである岸信介も該当します。吉田さんのもとで政治家として勉強した人たちですが、その淵源を辿ると、師匠格の師匠すなわちお祖父さんにあたるような立場の人が、古島一雄でした。

ここでもっとも注意を要するのは、古島は創価教育学会の顧問をやっていたという点です。顧問というのは、そんなに多くなく、もう一人秋月という人がいて、二人が顧問でした。そこまで創価教育学とか、創価教育学会にぐっと踏み込んだ人だったのです。この人が犬養と牧口の間を繋いだのだろうと思われる。こうしたことが、先の牧口の叙述から読み取れます。

次に『実験証明』のなかに何が書いてあるかというと、創価教育学というのは理論なのだけれども、理論が正しいかどうかは実験してみなければわからない。そういうことで牧口は、創価教育学会で活動している若い先生たちに、自分が書いた創価教育学のなかで示したやりかたで実験をしてもらったのですね。実験をしていることに対して、援助をおこなっていたのがこの古島です。その援助に対して、

「日本現在の最も大局観の政治家として、隠れたる名望を以て一世を指導し、貴族院議員であり、創価教育学発表以来八年間、非常の熱心を以てこの研究を援助し、本教育法研究の青年教育者には、誰にでも繁劇の用務を繰り合せて快談し、批判し奨励せられつつある」(『全集』８巻、14 頁)。

これが牧口の古島評です。つまり、古島という人は政治家をやり、官僚でありながら、長きにわたって創価教育学あるいは創価教育学会を全面的に応援してくれた。そして援助をしてくれたということなのですね。実際に創価教育学会に所属している青年たちがいろいろなかたちで悩んだり、迷ったりしているときには古島さんのところに行くと、きちっとした激励をしてくれる。そういうような人なのだ、ということで異体同心という言葉が出てきましたけれども、牧口がまさに異体同心としての同志に当たるくらいの関係を古島に対して抱いているというのが、こういうような文言からみてとれると思います。そして、最後ですけれども、こういう文言がありました。

「鳩山文部大臣が先づ師範教育の改革から着手せんとしたこと等も、犬養首相の教育政策に深い根柢のあったことを物語るものであった」。

この鳩山文部大臣とは、鳩山一郎のことです。1883 年の生まれで、牧口より 12 歳若い人にな

ります。犬養内閣で文部大臣を務めていました。「創価教育学支援会」の一員で、名前が連ねてありましたね。1931 年ですから、『創価教育学体系』が発刊された翌年になります。犬養が総理大臣になった段階で、彼が師範学校第二部を第一部と対等にする関係法規の改正を行ったのですね。これは専門的になって難しいのですが、第一部の師範学校というのは高等小学校を卒業して師範学校に入学する場合。このことを第一部と言っていました。第二部は、高等小学校を卒業してさらに中学校に進学し、その上の高等女学校に入学をした人たちが師範の資格を取るために勉強するということを指します。それぞれの年数からいうと、第一部の人たちは若い頃に先生になれるわけですよ。第二部はもうちょっと年齢がいってから教師になるということで、アンバランスがあるのですが、それをほったらかしにしていた。これを少しまとめなければいけない。制度そのものを整えるのだということで、鳩山文部大臣が第二部を二年制に変更しました。四年制のものを二年制に変更したので、これで高等小学校を卒業して師範学校に入った人と、中学校や高等女学校を卒業して師範学校に入った人の就学年数が一致するという、そういうことを鳩山がやったのですね。このことを指して牧口は、「師範教育の改革から着手せんとした」という言いかたをしています。

もともと牧口はこのときに、当時の教育制度に対しては、色々な意味で疑問をもっていたし、このままではだめだという意識ももっていました。教員の養成にしても、教育という分野にしても硬直化してしまっている。これをなんとかしなければならない。この時期に牧口がもっとも疑問に思っていた一つは、小学校長の登用試験制度なのです。私たちからすると何故そんなに問題にしているのだろうと思うかもしれませんが、当時校長の登用というのはどういうかたちで行われていたのかというと、視学官とか視学と呼ばれる官僚たちが実際に採用にあたって推薦し、決定していたのです。公平な基準があるわけではなかったのですね。市の職員や教員を採用するときに、視学官とか視学に対して、ある意味不正行為的なことが頻繁に行われていたのです。色々なところで問題になっていたのです。当然、そのような人々に決定権があれば、そういう問題が起こってきますよね。「情実人事」によって「実際に、教育疑獄事件も発生」していたのです。学校の管理的立場にある校長は、実際には現場の教員の任免権をもっていますから、任免権をもつような権力、立場を与えるためには絶対に公平な試験によって、誰もが認める人を選ぶべきだ、と牧口は考えていたのです。校長とか教頭は試験によって選ぶべきだと訴えていたのですね。当時は試験がなく、こういうことになっていた。これをより公平にして、公平にするからこそ校長や教頭にそれなりの立場、権利、力を与える。それでこそ正しい教育ができるのだ、というのが牧口の考えで、当時の教育システムに対する強烈な問題意識があったということです。校長の登用事件に対する牧口自身の考えかたが書かれています。

「秩序立った試験制度を設けて先づ学校長候補者を選択し、之に十分の信任をなして相当の敬意を表し、現在の不良者無能者の指導又は淘汰に自由の手腕を振るわせ」

ここで言っている「現在の不良者無能者」というのは、現場にこのような評価をしなければならない教員がいる、ということが前提に含まれていると思います。なにも牧口先生が教鞭をと

られている頃のすべての教師が優秀で、すべての人が素晴らしい先生だったとは限らない。実際に牧口先生が手を焼いた教師はいたようです。そういうことを踏まえたうえで、教育現場にふさわしくない教員もいるわけだから、その教員たちを指導し、あるいは排除しなければならない。なぜかというと校長に当時の教員の任免権、任命をしたり辞めさせたりする権利がありましたからね。戸田先生が、牧口先生のところに会いに行きますよね。それで一日、戸田先生と議論をします。牧口先生は戸田先生のことを真面目で、教員に向いているな、非常にいい青年だ、ということで自分が校長をしていた学校に代用教員として雇うわけです。雇うということを牧口先生が決められるわけです。そして、もしも何かあったら、それはクビだ、辞めてもらうというような任免権が校長にあるということですね。牧口自身が書いていますけれども、「指導又は淘汰に自由の手腕を振るわせ」ということは、校長が自分の考えや見識に基づいて、教員を雇ったり辞めさせたりする。その意味での自由な手腕を振るわせる。こういうことになると思います。

「能率の低下を防ぐと共に有能者の能率を向上せしめ、よって以て少壮有為なる人材の向かふべき進路を明確にするの方法が、目下の現状に鑑み最良の法案と信ずるのである」（『全集』６巻、94 頁）

ということは、校長をきちんとした試験で選んで、その人にどうすれば効率的な、効果的な教育ができるのかということを任せる。任せたうえで実際の教育現場を運営していくことがいま一番大事なのだ。こういう問題意識を牧口はもっていたのでしょうね。ですから校長の登用試験制度を設ける。これを主張していたわけです。

もう一つ、牧口が問題意識としてあげているのは、師範教育の改造ということですね。師範教育というのは読んで字のごとくですが、教師をどうやって教育するのか。教師にどのように力をつけさせるのか、ということです。牧口が主張しているのは、

「師範教育の最も重要なことは、教育法の学と術を身に付けさせること」

ということでした。このことをずっと主張しています。学というのは理論ですね、術というのは、実際に教育を施すことですから、実践ということです。牧口が一貫して考えていることは、いかにすごい理論であったとしても、実際にそれが現実の生活に生かされなければ、何の意味もない、ということを言っています。そういうことも踏まえて、日蓮仏法をだんだん自分の教育学に取り入れていきました。まさにこの理論と実践の一致、あるいは理論をいかに日常生活のなかに生かしていくのか。ここに視点があったと思います。それをそのまま現場の教育にもってくると、師範教育、教師の教育ですね、教師がどういう教師をつくればいいのかという問題が生じてくる。牧口には、やはりいまのままではダメだという意識があったと思われます。

「現在の疾病に対する局部だけの診断で対処療法を講ずるのみで無くして、この病疾は腫物外傷等の如く、局部的外科手術で平癒するものでは無くして、病源は内臓の奥深くに兆してゐる宿痾なる故に、目前の皮相にのみ囚われてゐる着眼点を転向して、真に将来の原動力の涵養所としての教育対策に熟慮するだけの余裕を持って欲しい」（『全集』６巻、108-109 頁）

つまり対処療法で悪いところだけ、悪くみえるところだけを取り払っても、根本的な解決に

ならない。それはむしろ表面の皮相ですよね、皮膚や何かに出てくる腫れものや傷ものというのは、もっと奥深く内側のほうに何か原因がある。そこを治さなければ抜本の病気の解決、治療にはならない、ということをたとえに使いながら、教育の現在のありようを訴えているわけですね。その意味では師範教育の改正というのは、重要です。なにしろ教育をするのは教師ですからね。教師がどういう教師なのかがやはり大事なわけです。その教師をいかにつくるのかということから治していかなければ、教育というのは変わらないのだ、という発想ですね。

牧口が校長として教鞭をとっていた頃の話というのは、ちょうど３年くらい前ですかね。夏季講座で『創価教育学体系梗概』（以下『梗概』と略す）という牧口が書いたパンフレットを使ってこの夏季講座でお話したことがあるのですが、これは昭和 13 年に出されたパンフレットなのですが、このなかで主張しているのも、理論と実践が一致しない教育はダメだということです。理論と実践を一致させる教育がとにかく重要なのだ、ということを訴え続けているのですね。だから教師のありかたというのは、自らが毎日改革するというか、変わっていくというか、そういう態度で臨まなくてはいけない。そして日々、子どもたちが新しいことを発見する喜びを味わうような教育をしなければいけないのだ。そのためにまず自らが毎日、毎日新しい発見があるような、喜びに満ちた教育をしなければいけない。こうしたことが、この『梗概』に書いてあります。そのために必要なのが信仰である。こういうことも『梗概』で書いています。牧口の一貫した考えかた、教育に対する取り組みかたと言って良いと思いますが、ここでも師範教育に対して同じように述べているのです。

さて、それに対して犬養はどうか。青年教育ということについて視点を当ててみたい。先ほど犬養の生涯でお話をしましたが、大正 12 年に長野県の富士見に別荘「白林荘」と名づけた。この「白林荘」で犬養は何を語っていたのかというと、

「自分は『何の繋累もなく何の欲求もなき純粋の浪人』として『青年の相談相手』になりたい」（岡、前掲書、230 頁）

この二重括弧で示したところが犬養の言葉です。『何の繋累もなく何の欲求もなき純粋の浪人』。その時、犬養は自分では政界を引退すると言っていたわけですからね。ですから、なんの繋がりもない、なんの欲求もない、なにもない純粋な真っ白な状態である。やりたいことは何かというと、青年の相談相手になりたい。こう言っているのですね。この意味では犬養は犬養としてのある種の教育とか、次の世代への理想というか、そういうものを抱いているわけですね。世に名前を遺す人は次の世代のことを考えている。これはあたり前と言ったらあたり前なのですが。犬養もまた、青年の教育に視点をあわせているわけです。さらに、

「過去四十余年の自分の政治的生涯は失敗もあり成功もあったといいたいが、実は『失敗だらけで今日に至った』、『それ故失敗の経験から之を青年に話して、青年をして自分の如き失敗を繰り返さしめぬ様に、所謂水先案内でもしたいのである』といった」（岡、前掲書、231 頁）

自分のいままでの人生を振り返ると、失敗ばかりだったというのですね。これは、非常によくわかりますね。私もしみじみそう思いますね。失敗が多かったなと。同じ失敗を繰り返さない

ように青年たちに、こういうことだけはやっちゃいけないよ、と言っておきたい。世の大人はこう思っていらっしゃる方は多いのではないでしょうか。わりと失敗のほうが残っているのですよね。逆にうまくいったことが残っている人のほうが、後々不幸になりますね。ビスマルクという政治家が言っていましたよね。「賢者は歴史から学び、愚者は体験から学ぶ」。すなわち頭の良い能力のある人は歴史に学び、有能じゃない人は体験に学ぶ。体験というのは自分が成功したことだけを思い出して、また同じことをやれば同じ結果が出るのではないかと思ってやってみるけど、それは絶対にうまくいかない。ありとあらゆる人の歴史を学ぶべきなのだ、ということですね。犬養も自分の人生を振り返って、それに基づいて次の人たちに何かを語っていきたい。牧口の青年や教育に対する考えかたとは、完全に合致しているとは言えない。同じとは言えないけれども、青年たちに対する思いや期待は一緒だろうと思いますね。これも色々なパターンがありますが、歳をとってくると青年に期待する人と青年に失望する人と分かれますね。青年に期待するというのが、どういうところから発せられるのか学ばなければならない、と最近思うのです。有名な話ですが、エジプトのピラミッドが建設された時代から、青年に対して文句がある。「いまどきの青年は」、という言葉があったと言われていますが、結局は、次の世代を担っていくのは青年ですから。青年をどうするのかというのは、すごく大事だと思います。犬養はこういう言いかたをしていました。自分の如き失敗を繰り返させないように水先案内でもしたいものだ。こう言っているのですね。

「犬養は議員も辞めたが、地元有志が無断で犬養を選出したので、議席を保持した。だが信州の白林荘に隠棲し、青年教育に余生を過ごそうとした」（五百旗頭、前掲書、122 頁）

これはどうしてかというと、この段階でやっと男子の普通選挙になりました。その前は税金を納める金額で投票権が認められていたわけですよね。もちろんはじめのときは高い金額に設定されていたのですが、だんだん低い金額になっていって、投票権を持った人が増えていきます。ここで考えられるのは、高い税金を納めている人は収入がある人です。当時でいうと名士とか、豊かな家の人たちしか投票できない。ということは、政治家はその階層の人たちの意見を聞かざるを得ない。その人たちのための政治だったわけですよね。それを、税金を納める額が少なくても、男性については全員投票権がある、というところまでもっていこうとした。これが犬養たちの政治の一つの目標だったわけです。普通選挙法ですよね。明治から大正の運動のなかで実現していきました。実現するのはいいのだけれど、男子の普通選挙のもとで色々な人たちがどうなっていくのかがすごく重要で、

「男子普選の下で無産階級が進出するのは望ましいが、政治対立の激化の危険がある」（五百旗頭、前掲書、122 頁）。つまり、政治に関心がなく財産がなくて、いままで選挙権をもっていた人たちに比べて豊かじゃない人たちがいる。そこでお互いの利害が生じて対立に至ってしまうのではないか。そういう危険性があるのではないか。それを避けるためにはどうしたらいいかというと

「既成政党が自己改革に努めるとともに、無産階級が穏健・聡明でなければならない。そのた

めの青年教育であった」（五百旗頭、前掲書、122 頁）

意味としては、これまでの政党がいまのままでの政党ではだめだ。なおかつ投票権をもった人たちが色々なことに理解をもって聡明でなければきちっとした政治は推進できない。そのために青年の教育をしなければならない、と犬養は考えた。五百旗頭先生の本にこのような論述があります。犬養の考えかたを五百旗頭先生が推察して書いていますが、おそらく普通選挙で青年が重要な役割を果たすということを前提に、犬養は青年教育に手を伸ばしたと言いたいのだと思います。そもそも犬養は、どういう政治を目標にして政治を推進していこうと考えていたのかということですが、視点をそこに定めて犬養の政治の考えかたを先に見ておきたいと思います。

政治家としての犬養が一言で評価されるのは「産業立国主義」なのですね。

「土地が狭隘であり原料が乏しい反面、人口増加の激しい日本が生きていくためには、海外発展、領土拡大が必要であるが、それは『今日の国際関係上全く空想』でしかない」（季武、前掲書、243 頁）

つまり、日本は土地が狭くて原料が乏しい。反面、人口がどんどん増えている。だから、日本は海外に発展しなければいけないし、領土を拡大しなければならない。当時の軍部や一般的な政治家はこう考えたわけですね。ところが犬養は、国際関係上それはまったく空想で、実際にはありえないことだと言っています。

そんな日本が生きていく唯一の方法は、まず原材料を安定的に獲得することである、これには「国際関係を密接円満」（季武、前掲書、243 頁）にしなければならない。原料がないなら原料を手に入れなければならない。対立構造では手に入らない。あくまでも日本が輸入するのであれば、国際関係は円満で仲良くなければならない、と言っているわけです。ですから領土の拡張のために争いごとを起こすとか、軍事的に征服、拡張していくことはありえない。

したがって、犬養の主張の第一の点は反戦です。戦争による、軍備による拡大を否定しています。第二に、「『科学万能主義』によって日本の技術力を高め製品の競争力をつけることである、これには無駄な経費を削減し、多くの金を科学技術の発展に向けるべきである」（季武、前掲書、243 頁）

この第二の部分について、日本の国内でさまざまな技術を開発していくには経費がかかる。その経費を獲得しようではないか。科学的な発展のためにお金を使おうではなないか、と言っているのです。当時軍部が言っていたことは、軍事費をとにかくたくさん欲しい。軍需品をたくさんつくりたい。軍備を拡張したい。そのために予算が欲しい、と言っていましたので、それに対する否定といえるでしょう。軍事品にお金を使うくらいだったら、科学の発展のためにお金を使ったほうが絶対に日本のためになる。これが犬養の「産業立国主義」の考えかたでした。

「『国際関係を密接円満』にするような外交政策の実行、つまり日中親善外交、および陸軍師団の削減による経費削減と科学技術に基づく軍備の充実がここから導き出される」（季武、前掲書、243 頁）わけです。

ここでは示していませんけれども、犬養は日中関係については非常に心を砕いています。い

かにすれば日中関係がうまくいくかということを、重点的に色々なかたちで行っていますし、実際に中国に何回か行って日中のために尽くしています。当時中国を侵略しようとか、日本はアドバイスをしたけれど中国はそれを聞いていない、と批判する政治家や学者もいたようです。それは違う。日本が中国に対して援助をした。援助をうけて色々なことをやるのは中国の人たちに任せればいい。それに対して日本はとやかく言うべきではない、というのが犬養の立場だったのですね。ですから、当時の軍部の首脳とか軍事の中心的な存在の人とは、対立する可能性が非常に高かった。こうした犬養の発言や考えを見ていますと、先ほど申した「５・15 事件」に、軍部の若い人がクーデターのターゲットとして犬養を標的にするのは、当然出てくる話ですね。自分たちがやろうとしている中国大陸への拡張、あるいは軍備の拡張について犬養は納得していないし、むしろ反対しているわけですから。そういうようなことが、犬養の当時の政策ありかただったようです。

犬養の考えかたと牧口の発言を照らし合わせると、戦争をすべきではない、戦争をしている段階ではないという考えは一致しています。あくまでも日本は、日本人ががんばって豊かになるのだ、と犬養も言っています。牧口はそれを教育にしぼってなんとかいい教育をすることが日本のためになると言っています。思想性として合致するかというと、根底的には合致するのかもしれません。反戦と人々が豊かになることを求めている点では一致するかもしれない。牧口は教育という観点で徹底的にそれを追求しようとしたし、犬養は政治の世界でそれをやろうとしていた。しかしながらこの点は推測にすぎません。なかなか証拠が出てこないのです。いずれにしてもそういうような考え方を持っていたということです。

４，「創価教育学支援会」と犬養毅

話を牧口と犬養に絞っていくために、もう一度じっくりと「創価教育学支援会」と犬養の関係性に焦点をあてて考えてみたいと思います。まず再度確認です。「創価教育学支援会」が初めて歴史上現れてきたのはいつか、ということを点検していきますと、「創価教育学支援会」の登場は、戸田城外の『推理式指導算術』です。この『推理式指導算術』の発行所を見ますと、「創価教育学支援会」になっています。初版本が発行されたのが 1930 年、昭和５年６月 25 日です。牧口先生の『創価教育学体系』の発刊日が 11 月 18 日ですよね。ですから、おおよそ５か月前に戸田先生の『推理式指導算術』の初版本が出ています。1933 年、昭和８年の 16 版までが「支援会」の発行です。16 版ですから 16 回印刷しているのですね。その後もずっと発行が続きまして、120 を超える版を積み重ねていきます。この時代の数学の参考書としては、ベストセラーです。当時、数学が好きだった少年たちは、『推理式指導算術』に飛びついたみたいですね。東京大学の数学の先生で、日本数学会の会長をやっていた先生が、中学生の時に『推理式指導算術』を使ったそうです。そして、夏休みかけてやってみたけどすごく楽しかったとのこと。どういう意味で楽しかったかというと、色々な問題が載っていて、２～３分で解ける問題もあるそうです。ところが、1 時間かけても解けない問題があると言う。それがうまく配置されているそうなのです。

数学が好きな子がチャレンジして、「できた」と喜びを感じ、簡単だと言って解いていくとまた難しいところにぶつかる。そういう参考書だったらしいのです。数学が好きだった人が『推理式指導算術』と聞くと、戸田城外だな、とすぐわかるのですね。そういう本だったということですが、この本は昭和８年までが「創価教育学支援会」の発行です。

そして、この『推理式指導算術』の背表紙に「創価教育原理に基づく推理式指導算術」ということで、創価教育原理という言葉もこの段階で初めて出てきたわけですね（『評伝』312 頁）。ですからこれが出て５か月後に『創価教育学体系』、牧口の理論の骨格といいますか、象徴といいますか、核となる本が発行されているわけです。その意味では、まず「創価教育学支援会」というのは戸田城外の『推理式指導算術』から始まったということです。ですから 1930 年６月には「創価教育学支援会」が存在していたということがわかります。発行日からすると、存在そのものはもうちょっと前だということですね。支援会がなんらかのかたちで経済的支援をすることによって発行が可能になったのですから。時期的にはこれで確認ができるわけです。

それからもう一つ。『創価教育学大系概論』があります。これは『創価教育学体系』の内容をあらかじめコンパクトにまとめたもので、はっきりと発行の年代がわからないのです。ちょっとした印刷物で、ペラペラのパンフレットのようなものを『創価教育学体系』の発刊の前につくって関係者に配ったと言われているのですね。『全集』８巻に載っていますが、発行の時期が４月から５月としか考えられません。これもガリ版印刷で「創価教育学支援会」となっています。わら半紙で、本文は 36 ページです。非売品ですから、ごくわずかな関係者しか持っていません。ここで注意を要するのは『創価教育学体系』の「体」はからだです。『創価教育学体系』が発刊される半年ほど前の『創価教育学大系概論』は「大」系となっているのです。半年の間に牧口先生は「大系」を考え直して「体系」に変えたということですね。ここにも「創価教育学支援会」と載っています。先ほどの戸田先生の『推理式指導算術』は明らかに６月 25 日とわかっています。『創価教育学大系概論』は４月から５月となっていますので、支援会は 1930 年の段階ではもうすでに結成されていたとみることができます。

先ほど紹介した、犬養を中心とした支援会のメンバー 28 名は、自分が創価教育学支援会のメンバーということを当然自覚しているわけですから、ある種の創価教育を支えていこうとする集団は 1930 年の段階である程度構成されていたということになるわけです。問題は、この「創価教育学支援会」の会員に政治家や政界関係者が多かった。これは何故なのだろうということが、今日の問題意識の一つですね。1930 年『創価教育学体系』が発刊される時には、それを応援するグループとして政界、官僚界、そういう関係者を中心にしたグループがまとまっていたわけです。その理由を考えてみたいと思うのですが、ヒントが一つありました。11 月 18 日に発刊された『創価教育学体系』第１巻の序です。３名が序を書いています。推薦の辞に近いかたちですけれども、田辺寿利（すけとし）という人が書いています。田辺寿利は当時「社会学」が出始めてきた頃で、社会学という学問の日本でトップの人です。牧口は教育学を社会学とも照らし合わせながら、独自の理論を展開しているのですね。それまでの教育学はまさに教育の世界だけの話だったのですけ

れども、実践してみたらそれではうまくいかない。社会学という広い分野を取り入れて、教育学を理論づけていかねばならない。これが第１巻にちりばめられています。専門家に分析してもらおうと思っているのですけれども、田辺寿利がこう書いています。

「一小学校校長たる牧口常三郎氏は、あらゆる迫害あらゆる苦難と闘いつつ、その貴重なる全生涯を費して、終に画期的なる『創価教育学』を完成した」

この「あらゆる迫害あらゆる苦難」というのが引っかかりませんか。問題意識をもたないで読むと何も引っかかりません。当然ですよね、牧口先生は苦労されていたはずだ、そういう感じに読めてしまうのです。しかし「創価教育学支援会」になぜ政治家が多いのか、なぜ政界関係者が多いのかなと思って読んでみると、ここに引っかかりました。さらにこう書いています。

「氏は現に、東京市の最優秀校たる芝白金小学校長であるが、威武に恐れず金銭に迷はざる氏の高潔なる性格は、あらゆる暴力と闘って信ずるところを常に貫徹している。怯惰なる無気力なる我日本の教育界、殊に醜聞渦巻く東京市の教育社会に於いて、氏の存在はまさに泥中の蓮である」

こう書いてあるのです。氏とは牧口先生ですね。「あらゆる暴力と闘って」ですよ。ちょっと気になるでしょう。どんな暴力だったのだろう。「殊に醜聞渦巻く東京市の教育社会」。醜聞ですよ。これにふり仮名をつけるのであればスキャンダルです。「怯惰なる無気力なる我日本の教育界」。田辺は徹底的に日本の教育界を軽蔑していますね。そのなかでまさに「泥中の蓮である」。非常にきたないもののなかに咲くきれいな花なのだ、という比喩まで使っているのです。それではいったい「あらゆる迫害あらゆる苦難」、「あらゆる暴力」。あらゆるものが出尽くしていますね。牧口先生に何があったのだろうか。そういう印象を持たざるを得ない。これが『創価教育学体系』第１巻の序に書いてあります。実際に牧口の人生を振り返ってみましょう。迫害とか暴力というものを、ここでは「迫害」と表します。

迫害その１。牧口校長排斥運動が実際にあった。大正８年 12 月に、牧口は大正尋常小学校の校長でした。そこで校長排斥運動が表面化してくるのです。校長排斥ですから、校長を辞めさせる。校長を交代させる、そういう運動ですよね。それが起こってきた。その運動の画策者、企んだ人物ははっきりわかっている。調査をしたら次席訓導の巽幸一という人であった。なぜこの巽が牧口の排斥運動に至ったのかというと、下谷区選出の東京市議会議員で高橋義信という人がいて、この高橋義信に働きかけて、牧口異動の申請書を下谷区長から東京市に提出させたということなのです。この巽は、牧口校長のもとで働いている教師でした。なぜこのようなことになったのか。

東京市議会議員の高橋義信は、自分の息のかかった人間を各所に配置することで、東京市の行政を牛耳っている東京市議会議員のドン。そういう存在だったようです。下谷区長から東京市に牧口異動の申請書が出たということを知った大正尋常小学校の父母の代表者は、区長、東京市長、東京府知事へ陳情しました。異動の申請書の撤回を迫ったのです。つまりここでの対立の構図は、東京市議会議員の高橋義信を中心とする、牧口を疎ましく思う、牧口がいると自分たちが

やりたいことがなかなかできない、というグループがいた。牧口が、目の上のたんこぶといいますか、邪魔者であり、その牧口を排除したい。そうした働きかけをしようとしたときに、それは困る、やめてくれと叫んだのは、現場で教育を受けていた子どもたちの保護者、そして子どもたちでした。子どもたちが申請書の提出で、抵抗を試みたということになります。しかしながら、結局は区長が東京市にすでに出してしまった。いまさら言っても遅いということで、撤回されないでそのまま牧口はこの段階では大正尋常小学校異動ということになりました（『評伝』217-218頁）。これが迫害の一つ目です。

二つ目。結構あるのです。いままで語られてこなかったのですが、牧口先生は本当に戦っています。安穏として小学校の校長の生活を送った方ではありません。迫害の二は、視学による牧口退職運動です。大正９年６月でした。

牧口は三笠小学校の校長に就任いたしました。三笠小学校はなかなか面倒な学校で、どちらかというと所得の低い、非常に貧困な人たちが集まっている地域の学校で、牧口はポケットマネーで子どもたちに給食として食べ物を用意するようなことなど、校長として徹底的に子どもたちを護ろうとしていたのです。そうした折に、東京市の教員の人事を一手に引き受けている部局である学務課で、牧口の退職運動が起きました。牧口の退職運動に乗じたのが、三笠小学校の主席訓導、先生のなかでもっとも中心的な存在であった浅見という人物と、訓導の工藤久太郎でした。この二人が運動を推進しようと、東京の学務課と組んだかたちになって、働きかけをしたわけです。

なぜ、学務課でこのような運動が起こったのかというと、牧口が提唱する校長の登用試験制度は、視学を否定する制度、つまり、当時の東京市が設定していた教員の登用制度に真っ向から反対するものだった。校長の声がだんだん大きくなると、東京市の職員、官僚としてもやや不本意である。そして、そうした声を上げる牧口が邪魔だ。牧口の反発が大きすぎる。このままでは自分たちの制度が維持できないということになるのはまずい。したがって、その人物を排除するのが一番簡単だ、というかたちになってきて、この人たちを使って牧口の退職運動を仕掛けたのですね。

その時に前田多門、創価教育学支援会の一員ですね。この人は当時東京市の助役でした。牧口の排斥運動を目の当たりにして、前田は牧口を保護しようとします。敵対する人が出てくるのですが、牧口を支える人も登場してきます。三笠小学校はなかなか大変な地域で、校長先生も苦労する地域だった。退職運動に乗じて前田がやったことは、牧口の白金尋常小学校への転任だった。これはまさに栄転です。もっとも階層が低くいろいろ手がかかる地域から、東京の代表的な小学校へ転任をはかってくれたのです。

迫害は三笠小学校内部での動きです。校長の退職、職を外せ、校長職を辞めさせろということですから。そこまで牧口の校長登用試験制度の主張はかなり広がっていた。共感を得ていた。それに危機感をもっていた東京市が動く。それを見ていた助役の前田が手を差し伸べて白金小学校に転任させた。こんな流れになるかと思います。これが迫害の二です。

前田多門は東京市の助役でしたが、郷土会を通して牧口と面識があったのです。郷土会というのは新渡戸稲造、柳田國男等々が集まって開いていた研究会です。そのなかの一員でした。現在の神奈川県相模市にあたる地域で、郷土研究を行う研究会ですが、その研究者仲間の一人です。そこで前田多門と知り合いだった。前田は支援会の一人として名前を記しています。そういう間柄の前田が牧口を護ったということになります。(『評伝』244-256頁)

さて、迫害はまだ続きます。意外にありますね。暗い話、辛い話なのですが、東京市教育局による牧口退職運動です。教育現場に色々な力をもった部局が、どうも牧口が邪魔なのですね。よほど牧口先生の発言が正当な論議だったのではないかと思えてきますね。

昭和５年、『創価教育学体系』が発刊される時期です。これと同じ時期に、白金尋常小学校の校長を退職させようとする動きが生じます。別の事件がもう一つ白金で起きていました。それは、小学校内での盗難事件です。これは当然、校長の責任になります。この事件は実際に物品が盗まれたのです。警察の調査の結果、ある教員が窃盗していたことがわかりました。ですから校長の責任が問われるわけです。牧口は非常に心を痛めています。非常に悩んで苦しんでいた。そういう時期でした。それに便乗するかたちで、東京市の教育局がこれ幸いに、牧口を辞めさせようとする動きを強めていたのです（『評伝』306-307頁)。

さらに迫害の４。牧口はそのために、白金尋常小学校から麻布新堀尋常小学校へ左遷されました。退職させようとしたのですが、退職させることができずに校長を続けさせなければならない。だから、校長は続けさせることになった。しかしながら、いつまでも牧口に言いたいことを言わせておくのは相成らん、ということで麻布新堀尋常小学校への転任を決めたのですね。ただし、この学校は昭和７年３月に廃校することが決まっていましたから、翌年には牧口を辞めさせることを前提にした動きだったのですね。つまり、東京市教育局は、「転任」の形をとって牧口を退職に追いやった（『評伝』339頁)。こういった迫害がずっと続いていました。

田辺寿利が『創価教育学体系』第１巻の序で、「あらゆる迫害」という言葉を書いていました。迫害の４は発刊の後ですから該当しないとしても、迫害の１、２、３はまさに田辺の言っている通りのことです。暴力という言葉も出てきましたけれども、実際に暴力事件が起きたかどうかということは定かではありませんが、それに近いようなことが起きていたのは推測できるわけです。これだけ色々なことが起こってくると、当然考えますね。「創価教育学会支援会」の会員に、政治家や政界関係者が多かった理由はなにか。要するに自分のことを排除しようとする動きは、明らかに政治が絡んだ動きです。高橋義信が東京市議会議員であったことが象徴的ですが、政治が絡むとこういうことになるのだということです。それに対して防衛しなければならないわけですから、牧口も政治家と政治関係者のつながりを通じて、自らの立場ややりたい仕事を行なうための、色々な場面を防衛しようとするのは当然ではないか。だんだん学んでいったのではないか。これはあくまでも推測です。牧口自身はそんなことを書いていませんし、言ってもいません。しかし、実際にこうしたことが起こっているわけだから、防衛策をとってもおかしくないのですね。そこで、一番気になったのは、戸田の存在です。

まず戸田は、『体系』出版に際して何をしていたのでしょうか。

1．大綱に即して原稿を整える

メモ風なものがあって、『創価教育学大系概論』という設計図がありましたが、それに基づいて原稿を整えるということと、

2．出版の手配・広報活動と資金の準備

これはよく池田先生が語られていましたよね。戸田先生が全部資金を出したのだという話をね。でも戸田先生も楽だったわけじゃないですよ。『評伝戸田城聖』が出たときに読んでいただきたいのですが、余裕をもって牧口先生を応援していたわけじゃないのです。自分がもっている財産とか資産を全部投げ出して応援しています。だから、余裕があり経済的にゆとりがあったから牧口先生を応援したわけではないのです。

3．牧口を退職させようとする動きを阻止すること

この3点を、自分がやらなければならないこととして、戸田先生が掲げていました（『評伝』308頁）。『創価教育学体系』の出版に際して、原稿と資金を準備しなければならない、ということは、当然のことですから理解できます。しかし、この出版の時期に、退職させようとする動きを阻止するということが出てくるのか、ということです。これは、牧口先生が命をかけてつくり上げた『創価教育学体系』が、政治的な力で出版を阻止されたら元も子もなくなるわけですよね。それを阻止するためにはどうしたらいいのか、という点を戸田先生は考えたのではないか。これが私の推測です。

そうすると一番よい方法は、なんらかのかたちで出版が妨げられないよう、出版をきちんと守れるように、こちらの体制をとること。そのために、支援会という存在をつくり上げ、そこに政界の大立者たちを並べる。そうすると少なくとも、たとえば犬養とか、鳩山とか、古島とか並べておけば、東京市の市議会議員がとやかく言ったりすることは、到底できないことになる。こうしたことを、もしかすると戸田先生は考えたのではないか。戸田先生の文言からは、こうしたことが推測できると思います。

戸田先生は『創価教育学体系』を出したかったのです。牧口先生の夢だったのですからね。戸田先生は、それを絶対に叶えようと。そのためにはありとあらゆる手立てを尽くそうとしたわけですね。それが現われているのではないかと思います。

5，まとめにかえて

さて、「創価教育学支援会」と犬養毅の話をまとめておくことにしましょう。まとまるかどうか不安ですが。

立憲政友会（政友会）は、戦前の帝国議会において日本最初の本格的政党政治を行った政党であるというのが政治史の研究者たちの評価です。本格的な政党活動を始めた。これが、犬養が総裁を務めた政友会です。昭和期に入り政友会が与党となったのは、田中義一という人が総理大臣になった時と、犬養毅が総理大臣になった時の2回です。年代をみますと、田中内閣は1927

年4月20日から1929年7月2日まで。犬養内閣は1931年12月13日から1932年5月16日で、「5・15事件」の翌日までです。これが年表で確認できる歴史的事実です。

政友会の基本政策というのはどういうものだったのかというと、協調外交と積極主義です。犬養は、産業立国主義という面では一貫していました。つまり、領土の拡張ではない。国内の科学をどんどん進めて国内の技術を高めていく。それによって日本を豊かにしていく。むしろどちらかというと国際協調派。ただし、政友会は色々な政治家がいて、対外問題とか思想問題になりますと、各自が思うように動いていたのでなかなか政策として一つの方向性に進められないという嫌いはありました。そういう政党だったようです。これは季武嘉也先生と武田知己先生の『日本政党史』のなかの研究の成果です（131頁）。

それを踏まえて最後にまとめに入りたいと思います。政友会と犬養の関係はどうであったのか。犬養について書いた牧口の文言をもう一度読んでみます。立ち返ってみます。

「初めて創価教育学の発表をなすや、直ちに異体同心の関係にある当時の内閣総理大臣犬養毅氏に紹介して、賛意を巻頭に表せしめられたことは、古島氏の普通ならざる尽力に基づく」（『全集』８巻、26頁）

という文言があります。つまり、巻頭の序の「天下に教ふ可からざるの人なく　また以て教えざるべきの人もなし」という揮毫を犬養がしたためて、牧口の生涯の夢であった発刊に際して贈った源を辿ると、「古島氏の普通ならざる尽力に基づく」ものであった。牧口自身が書いている通りだと思われます。古島が牧口に犬養を紹介したということは間違いなく事実として確定できると思います。古島という人がいなければ牧口と犬養はたぶん結びついていない。そうすると、なぜ古島は犬養を牧口に紹介したのか。古島と牧口はいかなる関係だったのか。その後、これは小説『人間革命』のなかで池田先生が書いていますけれども、出獄後、戸田はすぐに古島を訪ね、戦況を確認している。小説のなかで古島は弁護士ということになっていますし、「小島」になっていると思います。しかし、モデルは間違いなく古島です。それで戸田は７月３日出獄した後に古島を訪ねて、実際に戦争がいつ終わるのかということの確認をしているわけですね。古島が当時の政治の中枢で行われていることを把握していた。古島が把握しているということを戸田は知っていた。古島という人がそういう存在だということは、あらかじめ戸田はよく理解をしていた。もとを正せば、古島が犬養を牧口に紹介している時期から人間関係が続いているのですね。古島という人は信仰には入っていません。信仰しているわけではないのです。それにもかかわらず、これだけ牧口を護り、戸田との繋がりを継続してきたというところにポイントがありますね。これは邪推ですが、もしかすると昭和33年３月16日に岸総理を呼ぼうということになったのは、まだ古島との関係が残っていたのではないか、パイプが残っていたのではないか。それが可能にさせたのではなかろうか、という推測が成り立ちますね。あくまでも推測です。可能性があったのではないか、ということです。これは今後の課題です。

ここですこし視点をかえてみます。

古島一雄は、長い期間にわたって犬養の秘書でした。犬養のことをずっと見てきたわけですね。

犬養のことをそばにいて理解していた。その古島が、なぜ犬養を牧口に紹介したのでしょうか。古島については、伝記をはじめとして、いくつかの研究対象が残っているのですが、それらの著述を読んでも、牧口との関係が一切出てこないのです。牧口と古島の関係について、確証がとれないのです。仕方がないので、古島が犬養をどう見ていたのか、我われが知っている牧口とどういう重なりがあるのかなと考え、このような手法をとることにしました。

そこでまず、古島が犬養をどうみていたのかということに、いったん焦点をあててみましょう。なかなか資料がないので、ちょっとやっかいなのですが、古島の「人間木堂の面影」という一文があります。

まず、田中総裁、田中義一ですね。田中義一が突然亡くなるのです。その後継でどうにかして、犬養を引っ張り出さなければならない状況になる。そこで政友会の森幹事長が犬養に総裁就任のための要請に行くことになるわけです。ところが、犬養は並大抵の人ではない。並大抵の人ではない人は面倒くさい存在です。スイッチを押し間違えるととんでもないことになってしまいます。それを森幹事長はよくわかっていたので、側近の古島に一緒に行ってくれと頼みました。それに対して古島がどう答えたのかというと、「ソレは御免を蒙る」と断ったわけですよ。要請があったとしても一緒に行くのは嫌だと断ったわけですね。

古島曰わく、「私は政友会員ではない。が、君が折角出掛けるならば、参考の為めにコレ丈を言って置く。犬養といふ人は打てば響く人だ、大きく撞けば大きく鳴る、小さく打てば小さく響く。党がどうしても犬養でなければならぬといふならば、誠心誠意を以て直ちに犬養の心臓にぶつかるの外はない」（「人間木堂の面影」、鷲尾義直編『犬養木堂伝（下）』、原書房、1968 年、631 頁）。

こういう人だということですね。犬養が総裁になるということで周りが噂していたことは、おそらく犬養が色々な条件を出してくるのではないか。森幹事長は、それを想定していたらしいですね。ところがそれに対して古島は、そうじゃない。大きく打てば大きく鳴るし、小さく出ればそれだけのこと。もっとも大事なことは「誠心誠意を以って直ちに犬養の心臓にぶつかる」ほかはないと言ったわけです。現実にどうだったのかというと、犬養は無条件で総裁の就任を引き受けた。古島のアドバイスがきいたのですね。ものの見事です。それからこういうようなことも古島は書いているのですね。

「国民教育の根本を立て直す、――といふのは、明治政府以来の教育方針は、非常時に対する忠君愛国の精神を涵養することにのみ力を注ぎ、常時に於ける立憲国民の教育といふものが閑却されて居る、此の方針の立直しに力を注がねばならぬ、といふのが先生（犬養）の考であったのであります」（前書、635 ～ 6 頁）。

つまり、犬養の考えは、明治政府の教育は忠君愛国ばかりだ。忠君愛国というのは非常時のことである。常時のことではない。常時の教育というのは立憲国民の教育、つまり憲法に基づいて一市民として生きていくということが非常に重要だ。そのことが疎かにされているのは非常に困る、と言っているのですね。これは牧口の教育観に非常に近い。犬養の教育観が、古島の文章で初めてわかりました。牧口と犬養の教育観の共通点が少しずつ見えてきました。さらに、

「道義の標準を何処に置かれたかと言ふに、根本は儒学で、それを工夫と体験とに依って体得されたものと思ひます」（前書、639 頁）

というのが古島の犬養評です。ここで重要なのは、儒学という学問なのですが、それを工夫と体験とに依って体得していた、ということですね。これは牧口の教育現場での哲学に非常に近い。牧口が『創価教育学体系』を書いたときに、これは私の体験から出たものなのだ。いままでの教育理論は理論だけではないか。実践がないではないか。実践が大事で、体験から一つの理論を積み上げなければならない、と言っていますので、ここでも共通点が見出せます。そして、

「先生（犬養）は又、友人知己に対しては到れり盡せりの親切な人であった」（前書、640 頁）

人に対して至れり尽くせり親切の人じゃないと、人はついて行きません。やはり親切な人にはついて行きたいですよね。これも牧口と一緒なのかな、と思います。こうも言っています。

「一面極めて優しい方であったが､其半面には又非常に負けじ魂の強い方でありました」（前書、642 頁）

こういう言いかたをしているのですね。どこかで聞いたことがあるフレーズですが、古島が言っているのです。戦前に書かれたもので、犬養が亡くなった後に、様々な思い出を書物にまとめる時に、木堂の思い出として書いているわけです。

「要するに先生は信念の人であった。然らば如何にして其信念を得られたかと言へば、修練に修練を積まれた結果に外ならないと思ふ。人間は日々向上の功を積み、死に到る迄懈ってはならぬとは、先生の常に語られた所であります」（前書、646 頁）と言っています。

ここでの先生とは犬養のことです。牧口に置き換えたらどうでしょうか。もしかするとかなり近いものがあると言ってもいいのではないかと思いますね。牧口と犬養は 16 歳違うのです。同世代として生きたわけではありません。犬養は江戸時代の末期に生まれています。安政２年ですから。牧口は明治４年ですから 16 歳違います。けれども非常に似通った人格を、こうした文言から読み取ることができるような気がします。

古島は、犬養と牧口をどのように見つめていたのでしょうか。気になるところです。

牧口の犬養の死に対する感想です、

「不慮の災難に倒れられたのは、教育改革のためにも真に惜しむべきである」（『全集』８巻、26 頁）

これがまさに牧口の心情であったわけで、おそらくまさに異体同心の同志を失った。それに近い感覚を牧口が抱いたであろうことは想像に難くない。古島が犬養と牧口をつなぎ合わせたということは、本当に犬養のことをよくわかった古島、本当に牧口のことがよく理解できていた古島が、接着剤のように、この二人が同じ思考法といいますか、同じものを目指す。同じものというのは、究極は一人ひとりの人間の幸福ですよね。教育の果たす役割ですよね。これをどうも近いものとして認識をして、この二人をくっつけたのではないかな、ということが十分に想像できます。その意味では牧口の迫害の話ではないですが、非常に牧口も苦労し辛い思いをしながら、なんとか自分の夢を果たすために、ありとあらゆる手を尽くした。そのなかで犬養が古島を通じ

て牧口の思想と理想を理解して、それを全面的に応援していった。そういうことが見てとれるのではないかと思います。

今日ご参加の八王子市の樋口さんから、貴重な資料をいただきました。創立者池田先生が犬養について述べられている『聖教新聞』の記事です。この内容を最後に紹介させていただいて、今回の講義を締めたいと思います。池田先生の言葉です。

「『憲政の神様』と讃えられた犬養毅首相は述べている。『正義ハ終局の勝者也』。犬養首相は創価教育学支援会のメンバーであった。牧口先生の大著『創価教育学体系』には、揮毫を寄せてくださっている。犬養首相は、こうも述べている。『宗教を観て、第一に遺憾に思うのは、現代の宗教が民衆に向かって活動して居ない一事である。願わくはなお一歩を進めて民衆の上に働きかけて貰いたい』。特に犬養首相が強調したのは、宗教は、家庭の母たちに信念を与えるべきだとの点であった」

牧口と犬養の重なりを、池田先生が分析されているように受けとれます。宗教がどうのこうのというよりも、むしろものの見方として。研究を通してみるとどうもそういうようなことが言えるのではないかと思います。

いずれにしましてもはっきりわからなかったというのが結論です。結局、様々な資料からは、当人同士のつながりは見えてきませんでした。でも底流で繋がっていないと『創価教育学体系』にあの揮毫を贈るということはまずないだろう。どこかでこの二人は共感をし、そして僕たちにはわからないかもしれないのですが、なにか同じ目標、同じ理想が、この二人の目には映っていたのではないか。これは推測できます。

今日もあいかわらず推測が非常に多かったのですが、牧口先生が校長のときにうけた迫害を勉強して思ったことは、まさに創価教育は一日してならずということです。牧口先生の努力、戸田先生の努力そして池田先生の努力。こういうものの積み重ねのうえにいまの創価教育があって、これをまたさらに次世代の人たちに伝えていく。牧口、犬養ともに抱いた青年への期待と同じことだと思います。その意味で、創価教育の現場でさらに創価教育の発展のために尽くしていくということをお誓いして、今日の講義にさせていただきます。大変にありがとうございました。